

テレビは凶器だ

増田 一世

台所に立ち、夕飯の支度をしていたら、日本テレビの真相報道バンキシャという番組が始まった。2月6日6時からの番組だった。その番組で安城市のショッピングセンターの通り魔殺人が取り上げられ、その後にご意見番として医学博士であり作家の渡辺淳一氏が登場し、事件についてコメントした。

キャベツを刻みながら、耳を傾けていたが、一瞬手が止まった。渡辺氏が、

「最近精神障害者の事件が多くてね。精神病院に長く入院させておくわけにもいかなくなってきているので、病院のほうも間に挟まって困っているんです」と発言したのだ。もちろん、一字一句正確に覚えているわけではないが、彼の発言の大筋は違えていないと思う。

いまだきこんなことを公共の電波を通して、発言して憚らない人がいるのだという驚きと、精神障害を体験した人たちが社会的な偏見の中でどれだけ生きづらい思いをしているのかを考えると、怒りがこみ上げてきた。

そして、日本テレビの視聴者センターの電話番号を調べてすぐに電話をしたが、お話中で繋がらなかった。その後、番組中にキャスターから安城市の事件については、犯人が精神病の通院歴があったかは確認されていない旨の断りが入った。

しばらく時間が経過して、再び日本テレビの視聴者センターに電話をして、渡辺氏の発言が事実と反していること、精神障害者への偏見を助長することなどを抗議した。それに対して窓口の担当者は、

「お話は伺いました。個人的には自分もあ

の発言はおかしいと思ったが、この窓口では話を聞くだけで、番組担当者には伝えるが、番組でどう対応するかは番組を見てもらうしかない。または、番組中に連絡して直接担当者と話して欲しい」

ということだった。電話に出た職員の名前を尋ねたが、決まりで教えられないと言われた。インターネット上に番組ホームページがあったので、そこに抗議と意見を書き込んだが、むなしい気持ちになった。

テレビは凶器だと思った。一方的に決めつけられて、その場で反論もできない。テレビ局内部で何らかの反省がなされたとしても、その内容は視聴者には伝わらず、テレビを見た人は、「あの事件の通り魔は、精神障害者だったのだ。精神障害者は怖い」という印象が刷り込まれる。どこが真相報道なのだ。

2004（平成16）年9月に厚生労働省の発表した「精神保健医療福祉の改革ビジョン」では、改革の基本的方向と国の重点施策群の項で、国民意識の変革を掲げ、精神疾患に関する国民意識の現状として、「一部の国民の間には精神障害者は危険であるという漠然とした誤った認識がある」としている。そして正しい理解を進めるための施策の1つとして「マスメディア等の様々なメディアを媒体とした活動を進めていく」としている。

医師の国家資格を持った人間が、あのような発言をし、また、その発言を電波に乗せるテレビ局が存在する中で、国の対策はどこまで進むのか、大いなる疑問だ。